

大賞

本棚に眠る、「少年のお父さん」

さいが
雑賀 あかりさん

本棚の整理をしていた時、棚の奥から一冊の色あせた『ドラえもん』が出てきました。それは、父が子供の頃に読んでいたものだといいます。

何気なくページをめくると、余白に鉛筆で描かれた少し不恰好なドラえもんの落書きが目に見え込んできた。大きすぎる頭に、少し歪んだひげ。それは、今の頼りになる大きな背中の父の姿からは想像もつかないほど、無邪気で自由な筆跡でした。「お父さんも幼い頃、こうして夢中になってページをめくっていたんだな」と、数十年という時を超えて少年時代の父と対面したような不思議な感覚。かつて父が抱いたワクワクした気持ちが落書きから直接伝わってくるようでした。

私はその本をそっと本棚に戻しました。いつか私の読んだ本を時を超えて読む人がいるのなら、このような秘密の暗号を見つけてほしい。そんなことを願いながら、私はまた少し温かい気持ちで、本棚の整理に戻りました。